

行政・教師・演奏家が協働でつくる音楽鑑賞教室の取組み ー浜松市における「となりのオーケストラ」からの示唆ー

今 由佳里 [鹿児島大学教育学系 (音楽教育)]

Initiatives for musical appreciation classes with the collaboration of the government, teachers, and performers: Suggestions from the “Tonari-no-Orchestra” of Hamamatsu City

KON Yukari

キーワード：音楽鑑賞教室、となりのオーケストラ、浜松市、小学校、鑑賞教育

はじめに

演奏家が学校へ赴き、教室や体育館などを会場にコンサートを行うアウトリーチ活動は、現在日本で盛んに取り入れられつつある。プロの演奏家による生の響きを肌で感じられるこの活動は、子どもたちを音楽に惹きつけ身近なものにする重要な役目を果たしている。また同様に、オーケストラの壮大さや伝統芸能の奥深さを本格的な音響設備の中で直に味わえるコンサートホールでの音楽鑑賞教室も、子どもたちの感性を育むうえで貴重な機会となっている。しかし、これらの学校コンサートは、演奏家にプログラム内容を任されることが多く、教育現場の中では単発的で系統性のある学習内容にはなり難いという課題が指摘されている。本稿で取り上げる浜松市の音楽鑑賞教室「となりのオーケストラ」は、行政や教師、演奏家が開催のための会議を持ち、協働してコンサートプログラムを考案・提供するところに特徴がある。このコンサートは浜松市内の小学校5年生全員を毎年招待し、長年好評を博している。また本コンサートは、浜松市内にある小学校の年間指導計画の中にも位置付けられ、通常の音楽授業において事前学習も行われている。さらに、開催時期を2月に設定することによって、学習の総仕上げとしての役目も果たしている。

研究の方法としては、「となりのオーケストラ」運営委員会にオブザーバーとして参加し、コンサートの企画や実施方法などの実態調査を行うと同時に、浜松市内全小学校音楽主任からの鑑賞教室へ寄せられたアンケート結果の分析および考察から、本コンサートの特徴を導き出す。本稿では、日本ではまだ珍しいこの取組みについて紹介し、日本の音楽鑑賞教育へ示唆をもたらすことを目的にしている。

1. 「となりのオーケストラ」実施の概要

日本が世界に誇る数々の楽器メーカーが本社を構え「楽器のまち」とも称される浜松市は、平成13年度から毎年定期的に、「こども音楽鑑賞教室」を開催している。市内小学校5年生全員をアクトシティ浜松・大ホールへと招くこの行事は、現職小学校教師と教育委員会、市文化政策課、市文

化振興財団，演奏団体が連携してコンサートを企画・運営して実施されている。公演は，2日間午前と午後の部に分けられ4公演開催されている。なお，2015年に開催された音楽鑑賞教室の概要は以下の通りである。

【音楽鑑賞教室「となりのオーケストラ」の概要】

会場：アクトシティ浜松・大ホール（静岡県浜松市）

日時：2015年2月25日（水），26日（木）

【午前の部】開場 9:45 開演 10:30

【午後の部】開場 13:15 開演 14:00

対象者：浜松市内の小学校5年生児童全員

（99校，）1公演につき約2000名

演奏：浜松フィルハーモニー管弦楽団

主催：浜松市，浜松市教育委員会，浜松市文化振興財団

協賛：浜松ホトニクス株式会社，ヤマハ株式会社，株式会社河合楽器製作所，株式会社鈴木楽器製作所，公益財団法人ローランド芸術文化振興財団，株式会社遠鉄トラベル



2. 音楽鑑賞教室「となりのオーケストラ」の特徴

本コンサート事業について，主催者側は2つの特色を挙げている。一点目は，「音楽の都を目指す浜松市の次代を担う子どもたちが，良質な音楽を鑑賞することを通して豊かな感性を育む機会とする」こと，二点目は，「市内の小学5年生全員を対象に，行政関係者，学校関係者，オーケストラ関係者，地元民間企業が一体となり浜松独自の企画（選曲等）で開催されるのは全国でも唯一である」ことである。協賛には，日本が世界に誇る楽器メーカーの数々や民間企業が名を連ねており，教育関係機関だけではなく地元の民間企業も積極的に関わり，子どもたちの音楽文化向上に貢献していることがわかる。

浜松市における音楽鑑賞教室のこの取組みでは，子どもの発達段階や興味に沿ったコンサートにするため，行政と教師，演奏家が協働体制で企画している。また，鑑賞活動と相互にはたらかける表現活動の「しかけ」という点にも注目できる。浜松市の鑑賞教室では，子どもたちがオーケストラと共演するという場面を毎年意図的に設定し，好評を博している。

具体的には小学校の音楽科授業において事前学習として，鑑賞曲中に再生される特徴的なリズムを手拍子で入れられるように事前学習で練習してきたり，テーマとなるメロディーをリコーダーで演奏できるようにしてきたり，あるいは浜松に縁ある楽曲の歌を練習するなど，オーケストラと共

演するための準備を行って来ているのである。このような機会は、自分もプロのオーケストラ演奏に参加しているという実感と会場全体の一体感を味わわせるための有効な「しかけ」となっている。浜松市の音楽鑑賞教室の特徴について以下4点に整理し、考察を行う。

- 特徴1：小学校教師と教育委員会，市文化政策課，市文化振興財団，演奏団体が連携してコンサートを企画・運営して実施
- 特徴2：市内全小学校の音楽主任に鑑賞教室に関するアンケートを実施し，コンサートを企画
- 特徴3：郷土愛の育み
- 特徴4：「共演」体験の場面設定

特徴1：小学校教師と教育委員会，市文化政策課，市文化振興財団，演奏団体が連携してコンサートを企画・運営して実施

特徴1は、本鑑賞教室の最大の特徴といえるだろう。8月下旬に開催される運営委員会には、小学校校長を運営委員長として小学校教員から運営委員として9名、指揮者、オーケストラ事務局から2名、舞台監督1名、事務局として浜松市教育委員会指導課指導主事、浜松市文化政策課課長、浜松市文化政策課指導主事、浜松市文化政策課、浜松市文化振興財団事務局次長・アクトシティ音楽院担当課長、浜松市文化振興財団文化事業課より出席され、コンサートのテーマや内容、曲目を決定している。具体的な役割分担は、以下表1に示す。

【表1：実施体制と役割分担】

組 織	役 割
運営委員会 (現職小学校教師)	運営委員長 内容・構成の決定 通常授業内での事前指導 当日運営(司会, 場内アナウンス, ドア係, 受付, 場内誘導等)
教育委員会	各学校の音楽主任に対する指導法のフォローおよび連絡 当日スタッフ役教師の配置・スケジュールの策定, 出張依頼発行等
市文化政策課	事業計画及び予算の作成, 各学校への連絡通知書発送 各小学校の座席配置, 全体マニュアルの作成, 来賓招待案内等
浜松市文化振興財団	各学校へのバス手配, 運行計画立案 バス駐車場から会場への誘導 舞台制作, 出演者との連絡調整 会場手配, 広報, チケット販売, 一般問い合わせ対応等

* 『平成24年度文化庁委託事業 芸術文化活動に対する助成制度に関する調査分析事業報告書』

p.93 を基に作成。

なお運営の流れについては、①事前準備、②授業内での児童への事前指導、③鑑賞教室と、3段階に分けることができる。

【表2：運営の流れ】

事項	内容
①事前準備	<ul style="list-style-type: none"> ・運営委員会開催（夏期1日）：目的・曲目・プログラムの決定。 ・全小学校の音楽主任が事前に意見・要望提出。 ・内容や選曲に関しては、指揮者やオーケストラ事務局の意見も加えて、検討する。
②授業内での児童への指導（二学期から）	<ul style="list-style-type: none"> ・各学校にて音楽担当教師または5年生のクラス担任が担当。 ・クラス担任に対しては各学校の音楽主任がフォロー。 ・各学校の音楽主任に対しては、夏・秋の教育研究会にて指導法をフォロー。教育委員会からメールにて逐次報告。
③鑑賞教室当日	<ul style="list-style-type: none"> ・引率は5年生担任教師。音楽指導に携わっている人とは限らない。 ・4公演でのべ100人ほどのスタッフ、うち過半数が現場教師。 ・教育委員会、浜松市文化振興財団、市からも当日応援スタッフを派遣。バス降車場からの交通整理は応援スタッフ以外にバス配車業務受託業者も担当。

* 『平成24年度文化庁委託事業 芸術文化活動に対する助成制度に関する調査分析事業報告書』p.93を基に作成。

具体的には、8月下旬に開催される運営委員会でコンサートのテーマや楽曲を決定、2学期にはオーケストラとの共演曲に関する事前学習が行われ、2月の鑑賞教室当日を迎える。なお、各学校の音楽主任に対しては、教育委員会が夏・秋の教育研究会にて指導法をフォローする機会も設けている。浜松市の音楽鑑賞教室は、平成13年度より同様のコンセプトで継続実施してきた実績があるため、体制や役割の分担、運営の流れがスムーズに進むようパターン化して確立している。また、日々児童と向き合っている教師側の負担を減らすため、事前授業や当日の引率、運営の役割以外は、様々な組織が業務を分担していることにも特徴がみられる。

特徴2：市内全小学校の音楽主任に鑑賞教室に関するアンケートを実施し、コンサートを企画

音楽鑑賞教室運営委員会に先立ち、浜松市内全小学校音楽主任へアンケート調査を実施して意見や要望を汲み取り、教師側の意見を反映したコンサートにしていることは特徴2として指摘できる。アンケートの調査結果から、現場の教師が音楽鑑賞教室へ要望している内容が明らかになった。アンケート結果をみると、要望は以下9点に集約できる。

①オーケストラと児童の共演場面の設定

- ②児童に親しみを持って聴かせたい
- ③それぞれの楽器・音色について理解を深めさせたい
- ④教科書や音楽授業での学習との関わりを持ってほしい
- ⑤本物にふれる場としての期待
- ⑥オーケストラのもつ魅力を味わわせたい
- ⑦オーケストラの迫力を肌で感じさせたい
- ⑧鑑賞のマナーを身につけさせたい
- ⑨イメージを持たせやすい選曲を希望

1点目の「オーケストラと児童の共演場面の設定」については、参加型の演出にすることで子どもたちが能動的に楽しめるということ、会場全体の一体感を味わえること、みんなで演奏する感動や音楽を奏でる楽しさ、達成感を味わえることという理由がある。2点目の「児童に親しみを持って聴かせたい」という点については、オーケストラを身近に感じるきっかけになって欲しいという要望と共に、CMや映画で流れている曲等耳に馴染みのある楽曲を選曲して欲しいという意見が多数寄せられている。初めてのオーケストラ鑑賞となる児童が多いと想定されるため、耳馴染みのある楽曲の方が興味を持たせやすく、テレビやオーディオを通した音と生の音の違いを比較聴取できるという理由から記述されている。3点目の「それぞれの楽器・音色について理解を深めさせたい」については、普段は写真でしか目にしない楽器も多いため、楽器と音色が一致しているということが理解できるような楽器紹介の場を設定して欲しいという要望である。さらに、プロの奏法も披露してもらいたいという希望も見られる。4点目の「教科書や音楽授業での学習との関わりを持ってほしい」に関しては、運営委員会の選曲の際にも非常に重視されていたポイントのひとつである。運営委員会の際、教科書掲載曲をリストとして全員へ配布し、指揮者やオーケストラ事務局との話し合いを通して楽曲を選定していた。また浜松市の鑑賞教室は、1年間の学習成果発表会という性質も兼ねているため、授業で習ったことがある曲をリコーダーや合唱などで共演する活動も導入している。5点目の「本物にふれる場としての期待」は、本物に触れる場としての期待であるが、アンケートには「生の音楽の響きに包まれ、鳥肌が立ったり、涙が自然に溢れたりする経験をし、クラシックの素晴らしさを味わわせたい」という感性を育む上で貴重な機会との認識が教師側に強くあることが分かる。6点目は、「オーケストラのもつ魅力を味わわせたい」という要望である。楽器にはそれぞれ音色に特徴があり、弦楽器の滑らかな響き、木管楽器の優しい響き、管楽器の華やかで力強い響き、オーケストラ全体の音が重ねられた時の壮大で重厚な響きなど、子どもたちが音楽に「あこがれ」を抱けるような内容を希望している。7点目「オーケストラの迫力を肌で感じさせたい」は、オーケストラの迫力や音の響き、ダイナミクスを「体に直接ビンビン響くような演奏」をきかせたいという意見である。8点目「鑑賞のマナーを身につけさせたい」に関しては、演奏会マナーを身につけさせたいという点である。鑑賞教室では、実際に子ども一人ひとりの座席番号が記載されたチケットが事前に配布されている。また、児童それぞれに公演パンフレットも渡される。

このパンフレットには、演奏者の紹介や楽曲解説のほかに「会場では、話をしたり、音を出したりしないよう気をつけましょう。指揮者が登場した時、曲が終わった時には拍手をしましょう」等演奏会でのマナーについても記載されている。このことから、公共の場でのルールや鑑賞のマナーを身につけさせたいという意見が反映していることが理解できる。そして、将来子どもたち自らの意思でコンサートへ足を運ばせるきっかけづくりになっている。9点目の「イメージを持たせやすい選曲を希望」については、「例えば《オーケストラストーリーズ となりのトトロ（前年度実施）》のように音楽とナレーション、光の演出を取り入れ、耳で聴いて目で見て感じられるステージ」等の要望が寄せられている。

上記したアンケート調査の結果を基に、指揮者やオーケストラ事務局と選曲し、プログラムは3部で構成されている。第1部では楽器紹介、第2部では浜松市歌やリコーダーとオーケストラとの共演場面の設定、第3部はアニメの楽曲等子どもたちが聴きたい曲を取り入れている。なお演奏時間は、子どもの集中力を鑑みて75分を目安にプログラムを構成している。

音楽鑑賞教室では、演奏するために表情や姿勢が大切であるということ、演奏を人前に出すまでの努力に気づかせること等、プロの演奏家でも児童が通常うけている授業で習っていることを留意して演奏に臨んでいるということに気づかせられる内容となっている。



【写真1：楽器紹介の場面】

特徴3：郷土愛の育み

特徴3では、郷土愛の育みに関することが指摘できる。プログラムのひとつ《浜松市歌》は、浜松市出身の作曲家伊藤康英によってつくられている。浜松の美しい自然が歌われているこの歌は、オーケストラ伴奏のもと会場全員で声をあわせられる場面をつくる。なおこの《浜松市歌》は4年時の市の音楽発表会でも歌唱されるため、子どもたちの心に定着しており、時折自然に口ずさむ児童も見られる。歌唱共通教材である《ふじ山》は、郷土縁の楽曲として度々候補曲に推薦される。演奏は、浜松に本拠地をおいている浜松フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラ出演団員の7割が浜松市の出身者であり、プログラムの団員紹介の頁では、担当楽器と共に出身小学校と現在の在住校区が掲載されている。子どもたちは、ステージ上で演奏を披露している団員が自分と同じ小学校を卒業していたり、校区に住んでいる地区の住人ということで、親近感を持って演奏会へ臨めるようになっている。

特徴4：「共演」体験の場面設定

特徴4は、児童とオーケストラの「共演」場面が毎年必ず設定されているという点である。共演の形態は、リコーダーや合唱、手拍子であるが、8月の運営委員会で演奏曲が決定されると直ぐに共演曲に関する楽譜が手配され、9月中旬には各学校に楽譜が配布され事前学習が始まる。これまでの共演曲の傾向をみると合唱は《浜松市歌》や《ふじ山》、《ビリーブ》、リコーダーは、第1回目から現在まで《威風堂々》が演奏されている。また《カルメン》で指揮者体験コーナーが設けられている年があったり、《ラデッキー行進曲》に合わせて手拍子を加える共演も見られる。共演曲の練習は、教科書に掲載されている教材曲が中心のプログラム構成のため、学校教育の一環として事前学習の中で行われている。浜松市の鑑賞教室は、他県のように芸術鑑賞教室が多く行われる秋の開催ではなく、学習成果発表を兼ねた2月に開催されることも特徴的である。

【表3：共演体験楽曲】

開催年度	内 容
平成13年	ビリーブ（合唱）、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部
平成14年	ビリーブ（合唱）、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部
平成15年	ビリーブ（合唱）、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部
平成16年	ビリーブ（合唱）：アンコール、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第1部
平成17年	ビリーブ（合唱）、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部
平成18年	ビリーブ（合唱）、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部
平成19年	ビリーブ（合唱）、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部
平成20年	ビリーブ（合唱）、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部
平成21年	ビリーブ（合唱）、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部 カルメンより闘牛士（指揮者体験）：第1部
平成22年	浜松市歌、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部
平成23年	浜松市歌、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部
平成24年	ふじ山、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部
平成25年	浜松市歌、ふじ山、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部 ラデッキー行進曲（手拍子）：アンコール
平成26年	浜松市歌、威風堂々（ソプラノリコーダー）：第2部

平成27年2月に視察した鑑賞教室当日、例年通り第2部ではオーケストラと児童との「共演」を目にする機会を得た。2000人の子どもたちによる《浜松市歌》の歌声とリコーダーによる《威風堂々》の演奏は迫力があり、会場の一体感を味わえるかけがえのない機会となっていることがわかった。

運営委員会では選曲する際、アンケートに寄せられた意見を基に教科書に掲載されている楽曲リストや音源を準備して、各楽器の特徴やオーケストラの構成がわかる楽曲を指揮者やオーケストラ事務局側と相談しながら決定している。「子どもにきかせたい曲」と「子どもがききたい曲」とのバランスが考慮されている点が、鑑賞教室に効果的に働きかけている。先生方から寄せられたアンケート結果をみると、子どもたちが知っている曲を選曲して欲しいという要望が多いことにも気づかされる。CMで使用されている楽曲であったり、子どもたちに人気のディズニーやジブリなどのアニメ曲等、よく知っている曲を生で聴いたときの子どもたちの感動した表情が見てとれるとの意見も出されている。また、事前学習で共演曲の練習をすることによって、意図的に知っている楽曲をつくりだすという教育的な側面にも気づかされ、このことも子どもが聴き慣れないクラシック曲を飽きさせないための有効な「しかけ」になっていたと推察できる。

上記した4点の特徴は、現場の教師が音楽鑑賞教室に期待しているポイントが凝縮されたものではないだろうか。演奏を提供するアーティスト側もこの要望を知ることによって、音楽鑑賞教室のあり方が音楽的にも教育的にも有意義な方向に変化していくことと期待される。

おわりに

鑑賞教室当日、着席後開演を待つ間、各学校の児童が次々と持参してきた本を読む読書タイムへ移行していく光景は、教育的な側面を配慮した音楽鑑賞教室として印象に残るものであった。これまで浜松市は「演奏家」を育てることに力を注いできたが、これからは「聴衆」を育てていくことが大事になるという言葉もこの日耳にし、芸術文化へのアクセスをつくりだす浜松市のこの取組みが、今後の日本の音楽文化発展へと貢献していくものと感じられた。

学校外の劇場やホールにおいて行われる音楽鑑賞教室は、子どもたちの心に残る学校行事のひとつであり、生涯にわたり音楽を愛好するきっかけとなる。鑑賞の授業は、子どもたちが受け身になりがちであり、能動的な学習活動に発展させることは難しいという学校教育現場の声をこれまで度々耳にしてきたが、作品と子どもたちとの出会いの演出とアレンジを工夫することによって、子どもたちを積極的に音楽鑑賞に向かわせることができるのではないかと、浜松市の芸術鑑賞教室の取組みから示唆を得られた。

【参考文献】

- ・独立行政法人日本芸術振興会『平成24年度文化庁委託事業 芸術文化活動に対する助成制度に関する調査分析事業報告書』2014
- ・今 由佳里「公共ホールが支援する音楽の学び」『音楽教育研究ハンドブック』音楽之友社、2019

謝辞：本研究に際し，平成 26 年度「子ども音楽鑑賞教室」運営委員会の皆様には，多大なるご協力をいただきました。ここに記して厚く感謝申し上げます。

付記：本研究は，科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号 16K04775 の助成を受けて行っている研究成果の一部である。